
テイルズオブシンフォニア・自分の笑顔を誰かのために

プリンメロン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブシンフォニア・自分の笑顔を誰かのために

【Nコード】

N3548D

【作者名】

プリンメロン

【あらすじ】

これは全クリ後のお話。コレット主体で進む物語……

第一話

彼は旅立って行った

多分、もう会うことも無いだろう

いや・・・私が彼を避けてしまいかもしれない

彼は私ではなく、彼女を選んだのだ

分かれる間際までは笑顔でいれた

姿が見えなくなるまで、
「幸せに」とも思った

でも・・・彼が居なくなつてから気づいた

ああ・・・・・・・・私はこんなにも彼の事が好きだったのだと

【テイルズオブシンフォニア・自分の笑顔を誰かのために・前編】

《イセリア》

小鳥の囀りがきこえるとともに、朝が来たことに気がつく

ベットに横になっている身体を起こし、水色の毛布をどけ、部屋のカーテンを開けに立ち上がった

カーテンを開けると、まだ登りきっていない太陽が、山の向こうから顔を出していた

また始まってしまった・・・ユウツな一日が・・・

ピンクのパジャマから、青いワンピースを着て、下に下りていった
少し前までは、毎日白い神子装束を着ていたのだが、今はもうそんな必要も無い

それに、昔の服を見るといろいろ思い出してしまう・・・

一階には、お婆様が朝ごはんをテーブルに並べていた

今日はトーストに目玉焼き、カリカリのベーコン

椅子に座り、トーストをかじりながら考えた

最近、同じ毎日が繰り返されている気がする

朝起きて、ご飯を食べて、村を歩き回って、疲れたら家に帰り眠りにつく

代わりばえのない日々。やることも無い毎日。時間が流れるのを待っている自分

ここまで自分の中から

「やる気」というものが無くなるなんて思わなかった

いや、やる気が起こるようなことなんて無いのだから仕方が無い

仲間は皆、それぞれの道を歩み始めた

その中でただ一人、時間があのかのときのままの自分がいる

やる事を探しても、せいぜい家事くらいだろうか

でも仕方がないんだ。そもそも私は世界再生の為に生まれてきたのだから

私の使命は終わったのだ。

もう、私の価値なんて……………

無い

食べ終わると、食器をながしに置き、家を出ようとした。

その時、後ろから声をかけられた

「コレット。頼みがあるじゃけど、いいかの？」

老人のか唄れた声。お婆様だ

「……………うん」

「そうか。これをダイクさんの所に置いてきてはくれないか？」

そういつて、大きな巾着袋をコレットに渡した

軽く頷き、家を出た

正直ダイクさんの家にはあまり行きたくなかった。せつかく忘れようとしていることを、また思い出してしまうからだ

でも、やることも無いし、お世話になっているお婆様の頼みだから。行く

重い足を引きずるように、ゆっくりと歩き出した

《ダイクの家》

木造で作られた家の玄関に立ち、軽くノックをした

「だれでえい！」

家の中から声がきこえる。どうやら居るようだ

「わ、私です。コレットです」

「おお！嬢ちゃんか。入りな」

そつとドアを開けると、小柄の人が現れた。・・・ダイクさんだ
はやく用事をすませないと・・・

「あの・・・これ。お婆様からです」

「ああ。まったく、金はいいって言ったんだがな・・・」

あの袋の中はどうかやらお金だったらしい

以前、壊れた家の修理にダイクさんが無償で手伝ってくれたのだった

多分、そのお礼であろう

（そつだ・・・帰らないと）

そつと、その場を去ろうとした時

「あ、嬢ちゃん。今日ロイドが帰ってくるらしいんだ。どうだい、
あいつの顔見てってくれないか？あいつも喜ぶと思うんだがな」

その瞬間、頭が真っ白になった。

ロイドが・・・帰ってくる・・・

ダッ！！

気づくと私は走り出していた

もう周りなんて見えない。ただ、その場から逃げ出した

その場で待っていたら、合ってしまう

幸せな彼らに・・・

長い間走り続けた気がする

走り疲れ一息つくと、見慣れない場所に立っていた

綺麗な緑の草原が広がる場所に、策に囲まれた屋敷が一つ建っていた
レンガで造られた少し年季の入った屋敷で、大きさもさほどでもないが、とても立派であった

（こんな場所があつたんだ・・・）

そつと屋敷に近づくと、子供の笑い声が聞こえてきた

屋敷の敷地内で、数人の子供とその真ん中にシスターの格好をした女性がいた

はたから見ていると、とても楽しそうな光景だった

ここは何かの施設なのであろうか・・・そんなことを考えていると、一人の少年が私に気がついた

「おねーちゃん、だれ？」

すると、シスターが焦った顔でこちらに来たのだ

「あ、あの！すいません！勝手にこの屋敷を使っちゃって」

どうやら私がこの屋敷の関係者か何かと勘違いしている

「あ、いえ。私はこの屋敷とは関係ないんで・・・」

「そ、そうですか・・・はあーよかったです」

胸を撫で下ろすと、改めて私の顔を見てきた

「あのーどちら様でしょうか？」

「えっと、イセリアに住んでいる者なんですけど。えへへ・・・道に迷ってしまいました」

シスターはクスツと笑うと、

「そうですか。イセリアは、この川沿いを歩いていけば大丈夫ですよ」

「そうなんですか。ありがとうございます」

いえいえと、笑顔で答えるシスター。何故だかこの女性がまぶしく見えた

そういえば、ここでシスターは何をしているんだろう。聞いてみることにした

「あの、一つ聞いていいですか？」

「はい。何でしょう？」

「ここで何をやっているんですか？」

「・・・わたしはここで孤児院をやっています。この子達は、ディザイアンに家族を奪われたんです。そんな子供達を集めて、私が親代わりになっているんですよ」

「そうだったんですか・・・」

グイグイ

誰かが私の服を引っ張っている

下を見ると、そこには熊の人形を持っている茶色い長い髪の少女がいた

「おねーちゃん。あそぼ〜」

シスターは、スツと私の服から手を離させ、

「だめよ。お姉さんに迷惑でしょ」

「あ、いいですよ。今日は暇でしたし。」

「そうですか……。でわ、すいません。子供達の相手をお願いします」

申し訳なさそうに深々と頭を下げた

それから私は子供達と遊んだ

鬼ごっこにままごと、かくれんぼにだるまさんが転んだ

この数ヶ月間の中で一番充実した一日だと思った

走って疲れて笑って。子供達の笑顔を見ているうちに、いつものあ

れこれ考えている自分が消えていた

カーカーカー

カラスの鳴き声がきこえると同時に、日が暮れていることに気がついた

さすがに夜道はいろいろと危険なので、そろそろおいとましよう

「今日はありがとうございました」

頭を下げるシスターに、

「いえいえ、こちらこそ。とても楽しかったです」

「子供達もあんなに喜んでいて。久しぶりですよ、あんなに輝いた笑顔を見たのは。あなたには子供をひきつける何かがあるのかもしれないですね」

お世辞でもうれしい。照れ隠しに、えへへと笑った

そのときだった。私の後ろに目をやったシスターの顔が急にこわばった

「どうしたんですか、シスター？」

「……コレットさん。子供達を屋敷に入れてください」

ざっざっざっ

大勢の足音が聞こえてきた

振り向くとそこには、緑のボロボロのマントを着ている男達がこちらに来た

そのマントには黒い骸骨が描かれていた

「……ここいらに住んでいる山賊『ブラックスカル』っていうグループです。旅人を襲い、金目の物を奪い、殺す。……今まで見つからないように頑張ってきたんですが。」

「……もしかして、私の後をついてきたんでしょうか」

「コレットさんのせいではないわ。お願い、子供たちをお願いします」

シスター一人で山賊がどうにかなるわけが無い。私は護身用に持っていたチャクラムを取り出した

恐いという感情は無かった。今まで幾多ものモンスターやデザインアンと戦ってきた自分にとって、山賊なんてかわいいもんだ

自分でまいた種だ……自分で後始末をつけないと……

「私が……戦います。シスターは子供達と逃げてください」

それだけを言うと、駆け出した。

後ろでシスターの声が聞こえたが、それを振り切って山賊に向かっていった

「なんだ嬢ちゃん？おれたちや後ろの屋敷に用があるんだけどよ……」

軽い感じの男を中心に、がたいのいい男達がざっと二十人

一人では、ましてや今まで援護中心に戦ってきた自分にとっては厳しい……でも、やらなければ

「あそこに行きたいのなら私を倒してから行ってください」

山賊たちは笑いながら私を馬鹿にした

中心にいる男が指示し、一人前に出した

「なめた奴だな……。ペケジ！あのガキを殺せ！！」

大柄の山賊は、大きな斧を振りかざし私の頭の上から振り下ろした

ズドン！！！！

斧が振り下ろされ、土煙が上がった

「おいおい、ちつとは手加減してや・・・・・・・・っ！！」

山賊は驚いた。土煙が消えた後には、少女の死体ではなく仲間の身体が地面に倒れているのである

その横で、金髪の少女は両手に金色の輪を持ち、こちらを振り向くと

「・・・怪我をしたくないのなら引いてください！次は手加減しません」

「こ、このくそガキがぁー！！！！！！調子にのってんじゃねー！！！！！！！！！！」

一斉に剣を構えた山賊たちは、コレットに向かってきた

天使術は強力すぎるから使えない。だから使える技は、チャクラム

の技のみ

かなりきついが、今日と言つ日くれたシスターや子供達のために
戦う

たとえ勝算が無くても・・・

第二話

キンッ キンッ キンッ

金属がぶつかり合う音が響きわたる

一人二人三人四人・・・・

いったい何人の山賊を倒したか

長い間戦っていないかった身体での戦いで、疲労もたまり、体中が悲鳴をあげていた

息遣いも荒くなり、もう敵の攻撃を防ぐので精一杯なのだ

だが、引き下がるわけにはいかない

ここでやられたら、皆が危ない

「へへっ、もう限界っぱいな。お前ら！やっちまえ！！」

山賊たちは私を囲むようにすると、じりじりと近づいてきた

(・・・こうなったら・・・)

胸の前で十字をきり、天使術の呪文を唱えた

「その御名の元、この穢れた魂に裁きのひかつ！」

ガクンと膝から崩れ、地面に手をついた

もう呪文を使えるほどの体力も残っていなかったのだ

(もう、だめ・・・)

そう思ったときだった。

『その金髪、伏せろ！』

と、何処からともなく声が聞こえてきた。すかさず地に伏せると、ブンツという音と共に、大きな円形の閃光が走るのが見えた

そっと顔を上げると、私を取り囲んでいた山賊たちが倒れていた

そして、私の前に見知らぬ男が立っていたのだ

真っ黒いトレンチコートに黒いダボダボのズボン。靴はとても頑丈そうな皮製の靴に、ズボンにジャラジャラ長いチェーンをつけてい

る。銀髪の短髪のウ二頭。

おまけに自分より大きな鎌のような武器を持っていた

盗賊の間ではないようだが……

その時後ろからもう一つ、誰かの声が聞こえた

「コレットさん！大丈夫ですか！？」

シスターだった

私の傍によると、救急箱を取り出し、私の傷の手当をしてくれた

「シスター……危ないですよ……」

シスターはニツコリと笑うと、

「大丈夫ですよ。」

「彼」が来てくれました。」

彼？　彼とはもしかして、この黒服の人のことだろうか……

黒服の人は、山賊の最後の一人と対峙していた

「て、てめーはなんなんだ！？急にあらわれやがってー！」

震える手でナイフを持ち直し、切りかかってくる山賊に大鎌を振り上げ、斜めに振り下ろす

振り下ろした衝撃波が紫の閃光となり、山賊に直撃した

「ッぴやつやや~~~~~~~~~~~~!!」

と、謎の奇声と共に吹き飛び、見えなくなってしまった

倒れていた盗賊も、それを見て逃げるように走り去っていった

ふう、とため息をつき、大鎌の柄の部分をつ引っ張ると、大きな刃の部分が ガチン とはずれ、地面に落ちた

「ったく、また変えないと~~~~~」

そうばやきながらこちらに近づき、私の横にいるシスターの前まで来た

「大丈夫かシスターっと、・・・誰だこいつ？」

「この方はコレットさんですよ、アスラさん。コレットさん、ありがとうございます。こんなにボロボロになってまで・・・ホントにすいません・・・」

アスラと呼ばれた男は、ギロツとこちらを睨むと

「えっと・・・今までここに守ってくれてありがとな」

意外な発言に驚き、目を丸くしている自分にきづいた。慌てて笑い顔をつくって

「いえいえ。その、助けてくれてありがとうございます」

ペコリとお辞儀をする

照れくさそうに、頭をかきながら

「お、おう」と言った仕草が、何故だか『彼』を思わせた

シスターの傷の手当が終わり、再度自分の怪我した部分を見てみた

幸い浅い傷が多々あるくらいだった。さっき戦えなくなったのは、単なる体力不足だったらしい

「そつえば・・・」

シスターが何かを思い出したか、口を開いた

「コレットさん、お家に帰るのは大丈夫ですか？」

・・・忘れていた

空を見ると、夜空が広がり、とつくに門限が過ぎていることをしらせる

「少しまずいですね。それじゃ、傷の手当りがとつこざいました！」

「いえいえ、こちらこそ今日は本当にいろいろありがとうございました。夜道お氣をつけて」

立ち上がろうとしたとき、右足に激痛が走った

またその場にボタンと座ってしまった。どうやら足が攣ってしまったようだ。ホントなさけない・・・

「えへへ。足攣っちゃったみたいですよ」

「まあ、どうしましょう。・・・！そうですね。アスラさんコレットさんを家まで送ってくださいさらない？」

俺？と自分を指さし、ふうとため息をつくとき、アスラは私の前にしゃがみこんで、背中を向けた

「わかったよ。おい金髪、ほらおぶされ」

「い、いいですよ。少しすれば直ると思いますし」

「時間、やばいんじゃないの？それとも、嫌か？」

「い、いえっ、そんなことはないです。・・・あの、それじゃスイマセン、お世話になります」

肩に手を回し、アスラの背中に体重をかけた

「あの、私重くないですか？」

「いや、ぜんぜん重くないぞ。ってか、お前痩せすぎじゃないか？」

「駄目ですよアスラさん」

はにかむコレットを見て、シスターはアスラに肩をすくめて見せた

「女性に体重のこと聞くなんて失礼ですよ」

「そうなのか、金髪？」

「えへへ、そんなこと無いとも言いきれないような言い切れるような・・・」

自分で何を言っているのか分からなかった

アスラは困ったように頭をかしげ、

「うーん・・・。乙女心はわっかんねーな」

ふふつと笑うシスターに、私も照れ隠しで笑う

・・・こんな光景、前にあった気がする

『ロイド、私重くない?』

『ぜんぜん! 前よりずっと軽いぜ。お前、痩せたんじゃないか?』

『駄目だな、ロイドは。女性に体重のこと聞くなんて失礼だよ。最悪だね』

『そうなのか、先生?』

『ええ、そうね。禁句と言ってもいいわ』

『・・・馬鹿を言っていないで、行くぞ』

・・・ずっと昔の思い出だ

懐かしくもあり、胸を締め付ける感じもある

でも、今この感情を表に出したらまたシスターに心配をかけてしまう
とどめておこう、心の中に・・・

暗い森の中をしばらく歩き続けた

アスラは特に喋ることも無く、無言のまま歩き続けた

静かな時間の中に、アスラのズボンについているチェーンの チャ
リン チャリン と言う音だけが、響いていた。その音を聞いて
いるうちに、急に眠気が襲ってきた

コクン コクン

視界が歪み、意識が遠のいてゆく

(あ、寝ちゃう・・・・・・・・・・)

《アスラ視点》

少女を背負いながらしばらく森を歩いていたとき

くー　くー

背中から寝息が聞こえた。足を止め、喋りかけた

「……寝たのか？」

問いかけに答えない。どうやら寝てしまったらしい

「ったく。少しは警戒しろよ」

こいつは多分、馬鹿がつくほど人がいいんだろう。他人のために山賊に立ち向かうなんて……

ホント・・・よくやるもんだよ

(・・・サンキューな)

そう心の中で呟き、歩き出した

《次の日》

チュン チュン チュン

鳥の鳴き声が聴こえ、カーテンの隙間から光がさす

寝返りをすると、布団の隙間から涼しい風が入ってくる

目を開けると、見慣れた自分の机が見えた

それで気がついた

どうやら私は自分の部屋で寝ていたようだ

「彼」、アスラが私を送り届けてくれたのだろう

（後でお礼を言っておかないと・・・）

そんな事を考えながら着替えをし、一階に下りていった

今日の服は昔の神子装束。何故か今はこの服を見ても何もかんじなかった

つめたい階段をひたひたと下りていく。下に行くにつれ、パンの焼いた匂いとお父様の話声が聞こえる

お客さんでも来ているのであろうか。サツと髪を整え、リビングに行こうとした時、懐かしい声が聞こえた

・・・ロイド・・・

私はその場から動けず、そのまま立ち止まっていた

ロイドは数分話をすると帰って行った

それを見て、安心した自分がとても嫌だった

それから少し時間を空けて、一階に下りていった

食事をとりながらお父様やお婆様との会話は、ほとんど帰ってきたロイドの話であつた

それと、驚いた話だが、昨日家に運んでくれたのはロイドだったそうだ

どういうことだろう・・・

「コレット。今日はロイドに合に行つたらどうだ？昨日お世話になつたんだし。お礼を言うのも含めて、せめて顔くらい出したらどうだ。・・・お前の気持ちもわかるが、いつまでもそうしてはいられんだろう。」

私はスツと立ち上がり、食器を片付けると玄関に向かった

そしてお父様の方を見て言った

「お父様にはわかんないよ・・・絶対・・・」

それだけを言うと家を出た

お父様は私を止めることも無く、ただ私の背中を見ているだけだった

・・・私はいつからこんな嫌な子になったんだろう

自分の親の言うことも聞かず、お世話になった相手にお礼も言いに
いかないなんて

最悪だよね・・・ホントに・・・

自分を責め、下を向きながら歩いていると・・・

ドンッ！

「キャッ！」 「うおっ」と

誰かにぶつかってしまった

ぼと ぼと ぼと

ぶつかった相手の手に持っていた紙の袋から、ジャガイモが転がり
落ちた

「す、すいません！今拾います」

（何やっているんだろう私。また人に迷惑かけて・・・）

「あれ？お前・・・金髪か？」

聞き覚えのある声が聞こえた

顔を上げると、そこには黒いトレンチコートが特徴的なアスラさんが立っていた

手には溢れんばかりの荷物を抱えている

「あ、アスラさん！何しているんですか！？」

「見りゃわかんだろ、買出した。シスターに頼まれてな。てか、ジヤガイモ。ほら、拾ってくれ」

「あ、はい！」

急いで拾い上げ、抱えている袋に入れた

「すいませんでした。下を向いて歩いていたんで」

「いや、別にいいんだけどさ。てか、お前今日暇か？」

「え、はい。暇ですけど・・・」

「そんじゃ頼みがあんだけどよ。またガキどもの相手してくんねーか？あ、ちゃんとバイト代は出すぞ」

「バイト代なんていらないですよ。私でよければ遊び相手になります」

助け舟だった。あんな事を言ってしまったので、家に帰ることも出来ず、行くところも無い。こんな中で、また昨日のような一日が過ぎせる場所に行ける

こっちがお金を出したいくらいだった

「まあ金の事はおいという。んじゃ、今日も頼むな。」

ポンツと私の頭をはたく

私は今出来る最高の笑顔で

「はい！よろしくお願いします。あの、その荷物持ちましようか？」

「ん？んじゃ、これ持っててくれ。」

ドンと手渡されたのはさっきのジャガイモが入った紙袋であった

少し重いが、持てない程ではない

持ちやすいように持ち直し、アスラに話しかけようとした時には、スタスタと歩き出していた

おいていかれないように、隣に並び、歩き続けた

《コレットの家にて》

深いため息が、家の中から聞こえる

コレットの父だった

テーブルに座り、遠い目をしながらコレットの笑顔を思い出していた
その隣に座っているおばあさんに話しかけた

「・・・私は父親失格だろうか。あの子をまた傷つけてしまった・・・」

「自分の子を心配する親父が、父親失格なんて事はない。大丈夫じやよ。あの子ならまた心から笑ってくれる」

その言葉をどう思ったのか、コレットの父は立ち上がり、二階・コレットの部屋に向かった

静かにドアを開けると、綺麗に整頓された清潔的な部屋だった

周りを見渡していると、一つの写真たてが目にとまった

その写真たては倒されていて、ホコリもかぶっている

ホコリをはらい、持ち上げて写真を見てみた

そこに写っていたのは

赤い服を着た少年と自分の娘が肩を並べ、笑っている写真であった

「…………コレット。お前はまた笑ってくれるか？」

自分以外誰もいない部屋で、一人そう呟いた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3548d/>

テイルズオブシンフォニア・自分の笑顔を誰かのために

2010年10月9日12時36分発行